



| | |
|------------------------|---|
| Title | 農村社会の持続における新規参入者の役割に関する研究：北海道平取町振内地区と余市町登地区を事例に [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 鄭, 龍暲 |
| Citation | 北海道大学. 博士(農学) 甲第13266号 |
| Issue Date | 2018-06-29 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/71209 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | theses (doctoral - abstract and summary of review) |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | Yongkyeong_Jeong_abstract.pdf (論文内容の要旨) |



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称： 博士（農学）

氏名 鄭 龍暉

学位論文題名

農村社会の持続における新規参入者の役割に関する研究 —北海道平取町振内地区と余市町登地区を事例に—

近年、日本において農村人口の減少、高齢化問題が深刻化しており、限界集落や地方消滅など現在の危機的な状況をあらわす概念が多く挙げられている。このような状況の中で、全国では地域の担い手として新しい人々を呼び込む努力をされており、様々な担い手受け入れ体制整備の取り組みが行われている。北海道においても多くの地域で新規参入者受け入れ体制が構築され、その結果新規参入者数が増加傾向にある地域も少なくない。

これまでの北海道における新規参入者に関する研究は、新規参入者の参入過程に注目し彼らの定着条件に焦点を当てた農業経営学的視点での分析研究が多くを占めている。そのため、新規参入者個人がどのような考え方をもち地域に参入しているのか、あるいは参入後にどのような生活を送り、地域とどう関わっているのか等、参入者個人や地域に視点をおいた実証的研究は極めて少ない。新規参入者は地域の中で「農業の担い手」だけではなく、地域で農村生活を担う生活者でもある。そのため、新規参入者への研究は社会学的研究が必要とされており、特に地域の中での人と人のつながり（ネットワーク）に注目する必要がある。

本研究では、新規参入者の農村生活の実態を把握し、新規参入者が果たしている地域社会機能を明らかにするとともにこれまでの新規参入者が果たしてきた地域社会機能のほかに、新規参入者が新たに担っている新しい機能についても把握する。

第1章では、北海道における新規参入者受け入れ体制と新規参入者動向を明らかにするとともに、北海道の集落状況を把握する。北海道では、北海道農業担い手育成センターを中心に所得の確保、技術、定着、設備などの支援を行っている。北海道における新規参入者数は、2014年から大きく増加しており、2016年には117人が参入している。一方、北海道農村部の高齢化率は2015年34.6%に至っており集落増加率は-36.0%という大きい減少率を見せている。

第2章では、北海道平取町振内地区を中心に新規参入者の実態を明らかにしている。振内地区の新規参入者は、参入を決定した契機はそれぞれ異なるが、参入過程の中で地域の定型化された制度に伴って参入を行っている。栽培作目がトマトに限定されており、出荷先も決められているなど制限された農業経営形態を持っている。参入動機は多様であるが、それが経営形態には反映されていない。地域との関わりを見ると、最も大きく活動しているのがふれないネオフロンティアである。ふれないネオフロンティアは、既存農家の地域維持の危機感の中で作られた新規参入者支援組織であり、そこに新規参入者も加えて作られた組織である。振内地区の新規参入者は全員所属しながら後輩新規参入者の支援を行っており、現在は新規参入者が中心となって活動を行っている。また、受け入れ農家、技術指導や研修施設管理などの農業支援だけでなく、おすそ分けや生活相談などの生活への支援まで行っている。

第3章では、北海道余市町登地区における新規参入者の実態を明らかにしている。登地区における新規参入者は、定型化されていない体制の中で参入しており、栽培作目が多様であり、自分のワイナリーを造るため参入し、実際ドメーヌになっている農家が見られるなど、自分の理想や参入動機に沿った農業経営を行っている。地域との関わりを見ると、新規参入者が自ら加工組織やワインイベントを作りながら新しい活動を行っている。その一つの組織としてのぼりんぐは、新規参入者女性たちが作った組織であり、自分たちが栽培した作物を使って加工品を作り、それ

を消費者に販売する仕組みを持っている。また、余市ワインぶどう栽培農家のフェスティバル（LA FETE DES VIGNERONS A YOICHI）は、新規参入者研修生が中心となって開催されるワインイベントであり、既存農家や地区の有力なドメヌが参加するなど、地域全体の組織となっている。次に、しりべしなんでも百姓くらぶは、新規参入者による無農薬野菜栽培組織であり、余市町における動きとは言えないが、設立当時のメンバーに余市町の新規参入者が参加しており、登地区の新規参入者が多数参加しているなど、余市町と大きく関連している。

終章では、以上のような新規参入者の実態を比較しながら彼らの農村生活が地域の中で担っている機能を小田切（2014）、福与（2011）を用いて明らかにしている。

振内地区の農家組織であるふれないネオフロンティアは、既存農家を中心として作られた組織に新規参入者が加えられ、地域を維持していく点から「守り」の集落機能（小田切、2014）を持っていると考えられる。また、ふれないネオフロンティアの活動と福与（2011）の地域社会の機能を結びつけると、振内地区内の離農跡地に新規参入者を入れるなど、①資源管理機能を持っていると考えられる。また、新規参入者が入ったことで祭りや集まりが活発になり、地域が盛り上がっていることから、②地域振興機能、③自治機能、⑤価値・文化維持機能を果たしていると言える。さらに、新規参入者への生活支援を行っており、④生活補助機能も果たしていると考えられる。

登地区の場合、ワインイベントを通じて全国各地の人々を集めており、余市町、その中でも登地区を全国に知らせる役割を果たしている。これはまさに「攻め」の集落機能（小田切、2014）を果たしていると考えられる。しりべしなんでも百姓くらぶは、地域に留まるのではなく、周辺の新規参入者とも関わっている。そこで余市町の新規参入者は、地域内での関わりの他に、地域を超える単位での関わりも行っている事が分かる。また、新規参入者は、地域の中で農業生産を担っていることで①資源管理機能、地域を活発にさせていることで②地域振興機能を果たしていると言える。

高齢化と人口減少はますます進み、農村社会の維持の問題はさらに深刻化すると考えられる。そこで新たな担い手として新規参入者の重要性が高まってくるのは明らかである。近年農村社会において新規参入者は、農村を維持する生産的担い手としてはもちろん、農村社会を維持していく地域的担い手としても期待されている。しかし、これからの北海道の農村社会を考えた際、彼らが地域に住み続けるのかが課題となる。理想として考えていた農村社会の中で農業経営や地域との関わりを行いながら農村生活に満足しており、農村社会の中での担い手としての役割も果たしているが、将来営農ができなくなった場合、彼らが地域に残るかという問題である。その場合、新規参入者を継続して参入させないと地域の存続が問題となる。

北海道は、都府県とは異なる歴史的背景を持っており、新規参入者が地域の既存農家や他の農村社会の農家と関わりやすくなっている。さらに新規参入者が地域の範囲を超える新しい取り組みと役割を担っており、それによって集落機能の維持だけではなく、あらたなつながりが生まれている。新規参入者が一定の地域に集中的に入ることで、地域組織が生まれやすくなり、その組織を通じて地域機能を果たすようになる。一方で新規参入者は農業を行うために移住した人たちであり、離農後もその地域に定住するのか、という点については不安定である。新規参入者が入ることで集落の機能が維持され、新たな役割も果たす可能性があることが明らかとなったが、一方でその持続性をどのように考えるのか、という点については今後の課題である。